

全学共通教育の平成 24 年度実施に 向けた研修会 (FD) 報告

大学教育開発センター調査研究部編

第 1 部「全般的課題」では、来年度から本格実施される「大学入門ゼミ」や「情報リテラシー」や、同じく来年度から大きくフォーマットが変更されるシラバスについての説明がなされた。続く第 2 部「分科会」では、授業担当者を中心に 5 つの分科会に分かれて、より具体的な討論と情報交換を行った。

日時：平成 23 年 12 月 13 日 (火) 13 : 30 ~ 17 : 00

場所：教育学部 621 講義室ほか

対象：全教員 (特に、平成 24 年度全学共通教育担当予定の教員)

第 1 部 全般的課題

1. 全学共通教育新カリキュラム本格実施について
2. 平成 24 年度全学共通教育シラバスについて
3. 大学入門ゼミ、情報リテラシーについて
4. 全学共通教育に関する事務手続きについて

第 2 部 分科会

1. 主題 A 分科会
2. 主題 B 分科会
3. 学問基礎科目分科会
4. 教養ゼミナール分科会
5. 情報リテラシー分科会
6. 既習外国語分科会

以下、当日の提題者と書記が中心となって報告原稿を作成し、研修会の企画・実施にもあたった大学教育開発センター調査研究部が編集をおこなった。

【大学教育開発センター調査研究部 (FD 部門)】櫻井佳樹 (調査研究部部長・教育学研究院)、高橋尚志 (教育学研究院)、藤井篤 (法学研究院)、柴田明 (経済学研究院)、岡田宏基 (医学研究院)、石井知彦 (工学研究院)、柳智博 (農学研究院)、三宅岳史 (アーツサイエンス研究院)、葛城浩一 (大学教育開発センター)、佐藤慶太 (大学教育開発センター)

【その他の執筆者】田中健二 (共通教育部長・教育学研究院)、川畑朋昌 (修学支援グループ)

FD 研修会報告 第1部・全般的課題

司会・記録：葛城浩一（大学教育開発センター）

1. 全学共通教育新カリキュラム本格実施について

田中健二（共通教育部長・教育学研究院）

まず、本年度に実施した全学共通教育新カリキュラムについての報告がなされた。その後、来年度から本格実施となる「大学入門ゼミ」と「情報リテラシー」の開講にむけて、本年度どのような取り組みを行ってきたのかについての報告がなされた。

「大学入門ゼミ」については、共通教育委員会の教養ゼミナール実施部会および調査研究部で授業内容等を検討し、『教養ゼミナールハンドブック』を改訂した『大学入門ゼミハンドブック』を作成し、授業担当者へ配布することが説明された。

「情報リテラシー」については、共通教育委員会のもとに情報リテラシー実施準備部会を設置し、昨年度共通教育委員会です承を受けた全学共通コンテンツについて、調査研究部とともに検討し、内容を確定したこと、また、その内容については、授業担当者の便宜を図るとともに、全学的なご理解をいただくため、リーフレットを作成・配布することが説明された。

2. 平成24年度全学共通教育シラバスについて

櫻井佳樹（調査研究部長・教育学研究院）

まず、全学共通教育の到達基準と各科目の対応についての確認がなされ、到達基準は担当する科目によってすでに最低1つ（「大学入門ゼミ」は2つ）は決定されているが、その他の到達基準を1つ追加できることが説明された。なお、到達基準については、シラバスのフォーマットに含まれていないため、web入力以外の方法で、別途修学支援グループに提出していただくことが説明された。

また、来年度からシラバスのフォーマットが大きく変更されるため、シラバス執筆に際しての留意点の説明がなされた。大きく変更されたのは次の2点である。

まず、これまで「授業の目的・達成目標」とされていた欄が、「授業の目的」と「到達目標」に分離された。特に「到達目標」では、学生を主語にして「学生が〇〇できる」という表記にすることが確認された。また、これまで「授業計画」とされていた欄が、「授業計画並びに授業及び学習の方法」に変更された。そこには「自学自習に関するアドバイス」として自学自習の指示を明示することが確認された。なお、「水準DPコード」と「分野コード」の欄が新規に設けられているが、ここは記入し

なくてよいことが説明された。こうした変更にもない、例年以上に記述量が多くなることが予想されるが、シラバスの体裁上、分量を1枚に収めてほしいとのことであった。

最後に、シラバスのweb入力の締め切りは1月中旬であるが、その後、大学教育開発センター教員、共通教育コーディネーター、各科目実施部会委員等によるシラバスチェックが行われ、必要な場合は修正が求められることが説明された。

3. 大学入門ゼミ、情報リテラシーについて

佐藤 慶太（大学教育開発センター）

「大学入門ゼミ」及び「情報リテラシー」の本格実施にむけて、それぞれについての概要とともに、担当していただくにあたっての留意点の説明がなされた。

「情報リテラシー」については、11の到達目標が掲げられており、それに対応する項目が示されているが、到達目標に対応する項目をすべて教える必要はないこと（当該学部の学生にとって専門的すぎる場合は、適宜調整を加えること）や、到達目標に対応する項目以外のことを教えても構わないこと（到達目標に対応する項目を「コア内容」とし、学部、学科の学生にとって必要な内容を追加することも可能）、自分の所属でない学部や学科の「情報リテラシー」を担当される場合は、担当教員と当該学部・学科で内容の事前検討をお願いしたいことなどについての説明がなされた。

また、大学入門ゼミについては、全学共通教育スタンダードとの関係は、「②課題解決のための汎用的スキル（幅広いコミュニケーション能力）」だけでなく、「①21世紀社会の諸課題に対する探求能力」に対応しているため、「何のためのスキルか」が学生にとって見える授業デザインを心がけてほしい旨、説明がなされた。また、「全学共通コンテンツ」をモデル通り指導する必要はなく、学部の特性を考慮したカスタマイズをお願いしたいことや、学部共通のコンテンツを導入していただいても構わないこと、「情報リテラシー」の内容とゆるやかに重複する部分があるので、担当者間で連絡を取り、少なくとも重複の箇所を了解しておくことが必要であることなどについての説明がなされた。

FD 研修会報告 第2部・分科会

1. 主題A分科会

司会・記録：葛城浩一（大学教育開発センター）

本分科会では、まず後期開講授業の進捗状況の報告がなされた。「キャンパスライフを考えるー学生による学生支援ー」は、「香川大学および周辺地域の改善」をテーマに改善プランの企画及び実行計画を作成し発表させる授業であるが、そもそも学生の香川大学および周辺地域に対する関心自体が薄いため、授業計画通りに進めることができないということであった。また、「キャンパスから地域へー市民としての役割について考えるー」は、大学周辺で行われている地域貢献の内容を知り、実際に活動を行わせる授業であるが、すべての活動に教員が同伴することはかなりの労力であるということであった。そのため、来年度は、実際の活動を授業に組み込まずに、それを行った学生には成績を加算することで対応したいということであったが、これに対しては、百点満点に $+\alpha$ で加算するのではなく、百点満点の枠内で加算してはどうかとの意見が出された。

また、この話の流れで、主題Aの各授業には、正課外講座（KIPや学生基礎力UP研修等）の修了者に加算することを奨励しているが、成績を出す際に、加算した上で成績を正規分布させるのか、成績を正規分布させた上で加算するのかといった意見も出された。主題A担当者会議（6月24日）では、秀を3～6%、優・良・可をそれぞれ30%、不可を3～6%の割合で考えるという申し合わせを行っているため、こうした点が議論になったのである。必ずしも明確な答えは出なかったが、この申し合わせの割合がそもそも厳しいのではないかという意見もあったため、来年度に向けて、この申し合わせの見直しを行っていくことが確認された。

その後、主題A「人生とキャリア」には、男女共同という視点は重要であるということで、男女共同参画推進室の長安先生に1コマ分の授業を担当してもらうことが可能であることが伝えられ、長安先生には授業案についての説明をいただいた。説明後、授業担当者からは、非常に興味深い内容だが、もっと学生の関心に近い内容を盛り込んだ方がよいのではないかと、また、情報量を抑えて学生が話し合う時間を十分にとった方がよいのではないかと、といった意見が出された。加えて、授業を担当してもらう場合には、各授業の流れに沿った形で授業を担当してもらうことになるため、授業内容がある程度固まった上で微修正するよりは、例えばテーマごとに30分のモジュールを複数作成してもらい、その複数のモジュールの中から授業担当者が授業内容をチョイスすることも考えられるのではないかと意見が出された。こうした意見を踏まえ、長安先生には年内に修正案を出していただき、それを見た上で各授業担当者が判断することが確認された。

主題A「人生とキャリア」は、今年度から必修化された授業であるため、その実施に際しては多少なりとも混乱が予想されたが、現時点では大きな問題もなく概ね順調に進んでいる。ただ、主題A「人生とキャリア」に課せられた課題は少なくない。その課題を認識する上でも、本日の分科会は非常に有意義な機会となった。

2. 主題B分科会

司会：平篤志（調査研究部委員・アーツサイエンス研究院）、記録：柴田明（調査研究部委員・経済学研究院）

まず、司会の櫻井先生より、「主題Bの理解を深めるために」と題して、資料にしたがい主題科目の性格や位置づけ、授業計画や実施に当たっての留意点、「主題B」における各領域の特徴、シラバス執筆上の注意点などが説明され、その後出席者によるディスカッションが実施された。

参加者が自由に発言し合うという形で様々な論点が提示されたが、まず問題点としてあげられたのが、グループワーク主体の講義における講義運営の問題である。グループワークの場合、ディスカッションやその発表などに時間がかかり、人数が多い場合には教員ひとりでは対応しきれないため、TAをつけたり、定員に制限をつけたりできないかという質問が投げかけられた。これについては、現状では自由選択であり、定員制限を設けていないこと、TAについては予算の範囲内で教員の人选により選定できることが指摘された。またこの流れで講義運営全般の話題になり、他の先生から、出席を取る際にTAをつけた上でカードリーダー式の機器を導入することで対応しているという意見や、学生のモチベーションを高めるような課題を提示しているなどの意見が出され、講義運営に関する活発な議論がなされた。

次にシラバスについて議論された。シラバスをそもそも学生はあまり見ていないのではないか、学生がもっと見てくれるような仕組みが必要ではないかという意見や、香川大学はシラバス改革が遅いのではないか、他大学では成績を含めて広く公開されているなどの意見が出され、シラバスのあり方についての議論がなされた。

さらに、全学共通科目として、とりわけ理系科目を文系学生が受講する際に、難易度が高いと学生がついて行けないため、必然的に「広く浅く」の内容となってしまう、市民講座的スタンスになってしまうこと、またそれにも興味がない学生は素行が悪くなり、全体の雰囲気も悪くなる、などの意見が出され、それに対しては、今回の改革で主題Bの選択肢が増えたことがある程度解決をもたらすのではないかといった意見が出された。

最後に全学共通科目全体に関わる議論として、大学教育の入り口としての全学共通科目に対する教員や学生の意識をもっと高めていく必要があること、香川大学の「アイデンティティ」を全学共通科目の中で全面に押し出していく必要があることなどが問題提起され、たとえば「四国学」の講義を主題Aにするという提案を含めて、今後さらに議論を深めていく必要があることが確認された。

3. 学問基礎科目分科会

司会：中谷博幸（調査研究部委員・アーツサイエンス研究院）、記録：藤井篤（調査研究部委員・法学研究員）

「全学共通教育スタンダード、到達目標及び水準について」、司会を務めた歴史学の中谷教員から、

学問基礎科目の卒業要件単位数は学部により異なっており、果たして現行の体制で学生は当該学問の基礎力を習得できているのか、個々の教員の努力だけではどうにもならない制度的な問題があるとの指摘があった。

この問題提起を受けて、本分科会参加者各人の科目領域では、教育すべき内容や到達目標がどのように考えられているのかについて議論が行われた。倫理学担当の斉藤教員は、学問基礎科目としての倫理学は経済学部での担当科目（人間論、ヨーロッパ思想史）とは直接リンクしない内容を持ち、倫理学の入門編のようなものだと発言した。

哲学担当の石川教員は、学問基礎科目としての哲学はまったく基礎知識のない人たちを相手に教えるものであり、教育学部の教員養成課程において要求される哲学の知識の伝授を中心とした教育とは大きく異なる性格をもっていることを指摘した。

物理学 A を担当する磯田教員は、共通のテキストを使用するかどうかについては、科目領域のなかでも賛否両論があり、議論が継続中であること、また物理学を履修する工学部生にも所属学科によって関心に違いがあることなどを説明した。

生物学 B 担当の田淵教員は、生物学に対する学生の知識・理解の程度には大変大きな差があり、農学部の学生が多く履修する生物学 B は、後に農学部で履修する基礎生物化学につながるような科目として位置づけられていると報告した。

記録係を務めた藤井教員は、政治学の科目領域では、教員の専門分野にこだわらず、スタンダードな学問内容を教えようとする点で大まかな合意があるものの、何が政治学のスタンダードかは必ずしも明らかではない現状を指摘した。

さらに中谷教員は教養学部設置構想時のカリキュラム案を引き合いにして、香川大学全体で各学部間の垣根を低くし、学生にとって必要な科目を所属学部に関係なく履修しやすくすること、そのためにもダブル・メジャー制度（主専攻とは別に副専攻をもつ）の導入などを今後検討すべきことを指摘した。制度改革上の困難はあるが、本学が幅広い見識をもつ人間を育てていく必要については大方の理解が得られた。

4. 教養ゼミナール分科会

司会:佐藤慶太(大学教育開発センター)、記録:三宅岳史(調査研究部委員・アーツサイエンス研究院)

まず、大学教育開発センターの佐藤教員より、平成 23 年度の「教養ゼミナール」の実施状況の説明、平成 24 年度から本格実施される「大学入門ゼミ」の概要について説明が行われた。なお、過渡的期間である 23 年度と 24 年度との相違は、以下の 3 点である。

- ① 対応スタンダードを「21 世紀社会の諸課題に対する探求能力」と「課題解決のための汎用的スキル」の 2 つとし、具体的なテーマ研究の中でスキル教育を行うことを奨励する。
- ② コミュニケーション科目のなかに、「学士課程教育導入」と「汎用的スキル育成」の 2 つのセクションを設け、前者に「大学入門ゼミ」を位置付ける。「大学入門ゼミ」において、スキル教育が自己目的化することを防ぐための方策である。

- ③「全学共通コンテンツ」の「ノートのとり方」を「情報整理の方法」と名称変更。併せて、文献読解の技法を補論として授業モデルに組み込む。

説明を終えた後、まず全体的な問題についてディスカッションが行われた。まず「各教員は全学共通コンテンツの専門家ではなく、大学生に教えることは正当化されるのか」という問いが出席者から提起された。これに対して、司会の佐藤教員は「研究者としてそのような能力は身につけているはずなので、それを1年次生に教えるように活用できないか。日本語技法に関しては、専門家にチェックシートを作ってもらってハンドブックに一つの基準を示している」といった回答をした。この問題については、今後検討が必要であろう。その他、「今年度の教養ゼミナールにおいて、筆記試験の割合はどのくらいか」、「課外活動にはどのような具体例があるか」といったことについて、参加者同士で情報交換がおこなわれた。最後に、シラバスには全学共通コンテンツの指導についてどのように記載すべきか、という問いが出たが、これについては、授業計画に組み込んで記載する必要は必ずしもなく、授業方法や概要などに盛り込まれていればよい、ということが確認された。

続いて、学部ごとに分かれ、今年度の実施を踏まえた来年度の計画や、大学入門ゼミ全体の課題についてディスカッションが行われ、最後にフロア全体で議論の内容をシェアした。各学部のディスカッション報告は以下の通り。

教育学部（人間発達）

施設訪問に関しては、現在3つある訪問先を1つに減らす。受け入れ態勢の問題で、3グループに分けて日にちをずらすことを検討している。ノートのとり方は今年は3分クッキングを使用した。来年は、5分から15分程度の実際の授業を模擬的にやり、ノートをとらせてみるなどの試みをする。それにより、各教員の研究内容を紹介するというメリットもある。

医学部

大学入門ゼミは医学科と看護学科の混成で、基礎学力に差がある。どのレベルに合わせるか。9つのクラスに分けているが、その場合、クラス間の内容の調整が難しく、互いの把握ができないという問題がある。プレゼンやレポートの書き方などは、まとめてできると効率的だが、実際には、スケジュール調整が難しく、結局、各担当の人が各々にやっていかざるを得ない。専門科目の内容と全学コンテンツの折り合いをつけていくのが難しく、課題。

法学部

施設見学で、最初は刑務所、鑑別所などを考えたが、どのくらいの人数を受け入れることができるか態勢を調べる必要がある。情報リテラシーで大学図書館に行って資料検索などを学ぶというので、法学部の大学入門ゼミでは、法学資料館での資料の探し方などをとりいれる方針について話し合った。しかし、法学資料館も施設が大きいので、課題がある。早急に担当者間での調整が必要。

工学部

工学部では、全学コンテンツと学部コンテンツをある程度決めて実施し、残りの時間は個別に対応

している。現在の学部コンテンツは、メンタルヘルス、安全教育などを全体でやっているが、学部コンテンツをもう少し増やしてはどうかという話が出た。カリキュラムの履修を少し入れてもよいなどの意見がある。全学コンテンツについては、レポートやノートで1コマもたすのは難しいので、実験などと絡めるとよいのではないか、という意見が出た。

農学部（+司会）

どこにレベルを定めるか。できる学生とできない学生の差が大きいので、評価基準を定めてほしい。それが質の保証にもつながる。また、できない学生はどうするという問題も出てくる。そのほか、授業期間中に、グループ学習の編成をかえる必要があるか、話が苦手な学生はどう対処すればよいのか、アウトプットの能力が重視されすぎて、受け取る力を鍛えることも必要ではないか、という話が出た。

5. 情報リテラシー分科会報告

司会：林敏浩（調査研究部委員・工学研究院）、記録：高橋尚志（調査研究部委員・教育学研究院）

全体会の後、情報リテラシーの林敏浩準備部会長（工学研究院・総合情報センター）の司会により、情報リテラシー分科会が開催された。参加人数は各学部の実施担当予定者を中心に14名であった。分会会の冒頭、まず司会より来年度（平成24年度）本格実施となる情報リテラシーの概要説明がなされた。この科目の基本は、学生たちのバックグラウンドにバラツキはあることが十分予想されるものの、全香川大学生が早期に身につけるべき情報リテラシーを1年次のうちに学び、情報技術を利用して様々な情報分析、適切に判断する能力を養うことにあることが強調された。そして、授業目標として掲げられる11項目を確認し、学生たちの実情に応じて、かつ、学部学科等の特色に応じて、内容の増減なども図りながら実施していくという基本方針が説明された。この種の授業の全学一斉の機械的画一的な導入というのでは、司会者が前任校で実施した際にうまく機能しなかった、という例も紹介され、やはり望ましいのは学部単位や学科単位でのやり方を工夫するような今回のやり方の意義が語られた。

平成24年3月より基本ソフト（OS）を含む教育用計算機の更新が予告されているが、その時の対応について議論があった。出てきた時点で個別に対応する（工学部や農学部などは、指定のPCがあるので、その指定機種OS更新期に、他はPCルームOS更新期に）各授業単位で対応することとなった。ここで重要な点は、OSや特定のソフトの使い方を教えるのがこの授業ではなく、具体的な例の1つとしてOSなどの取扱いについて紹介はあるが、あくまで情報分析力や判断能力の獲得を目的とするようにとの確認がなされた。

メールソフトをG-Mailにすることになったが、その事についての是非について語られた。結局は、学生向けメールサービスを維持していくにはその時間とコストが高くてつき、この際定評のある外部サービスを利用することになったことが説明された。また、G-Mailを利用するならば適当なマニュアル

ルが必要ではないかとの質問が出たが、実はその点については既に検討を行っており、極めて簡単な取扱いなのでかえってマニュアルなどは邪魔になるだけだとの専門家の意見もあり、マニュアル本などは導入しないことになった経緯が紹介された。

シラバスについては、基本的に学部単位や学科単位などでの判断で書かれるべきであるが、概要などは情報リテラシー全体の理念や基本方針を示すものであるので、統一する方向が語られた。テキストについても、統一するかどうかも含めて検討中であるが、固定してしまうと授業内容も固定的になる可能性があり、基本的には実施単位で自由に選ぶのが望ましいとされた。情報発信の事に関しては、現時点では加味されていないが、学部学科の実情に応じてやってもらって良いという方針である。

学生の基礎知識や到達を測るアンケートなどを、情報リテラシー部会が正式に立ち上がる来年度からの課題にすることが決まった。特に新入学生たちは高等学校で「情報」の授業を受けてくるわけだが、そのやり方が千差万別であるためスキルレベルに相当な凹凸があることが予想されている。よって、事後の到達度もさることながら、事前の調査の必要性は高いと考えられる。また、授業目標や授業全体の進め方についても、現時点で示されているものは必ずしもかっちり決まった固定的なものではなく、実際に授業を行う中で情報交換・意見交換もしながら部会で検討を加えていくことになった。その他、情報リテラシーのパンフレットを作る計画だとか、担当者間での情報交換の方法、図書館利用の件で図書館の協力を得るとか、TA のことなど実に多様な内容で意見交換がなされ、大変充実した分科会であった。

6. 既修外国語 (英語)

司会・記録：長井克己 (大学教育開発センター)

【報告内容】

新カリキュラムの導入に伴い、既修外国語 (英語) の授業科目名を下記のように変更していることを確認した。

英語コミュニケーション基礎演習 → Communicative English I (2 単位)

英語コミュニケーション総合演習 → Communicative English II (2 単位)

英語コミュニケーション LR・SW 演習 I → Communicative English III (1 単位)

英語コミュニケーション LR・SW 演習 II → Communicative English IV (1 単位)

2 年次生を対象とした Communicative English III / IV は、平成 24 年度からの実施となる。この 2 つの授業の具体的な内容等について大学教育開発センター所属英語担当教員が説明を行った。

(1) Communicative English III

・1 年次の 12 月に受験した TOEIC のスコアに基づいて、学部ごとに 3 つのレベル (上位、中位、下位)

に分ける。同レベルに所属するクラスの TOEIC 平均点が、同程度になるようにクラス編成を行う。

- ・主としてスピーキング能力（オーラルコミュニケーション、ディスカッション、スピーチ、プレゼンテーションなど）の育成を目標とした授業を行う。
- ・大学教育開発センター所属の英語担当教員が教科書を選択するが、各授業担当者が教科書を選ぶことも可能とする。また、教科書を使用しないで授業を行うことも可とする。

(2) Communicative English IV

- ・学生は Communicative English III と同じクラスで授業を受ける。教師は前期と後期で別の学生を教える。
- ・主としてライティング能力（エッセイ、e-mail など）の育成を目標とした授業を行う。
- ・大学教育開発センター所属の英語担当教員が教科書を選択するが、各授業担当者が教科書を選ぶことも可能とする。教科書を使用しないで授業を行うことも可とする。
- ・英語を苦手としている学生（例えば、TOEIC のスコアが 300 点以下の学生）には、文法指導を重視した教材を使用することも考えられる。その場合は、文法の指導のみで授業が終わってしまうことがないように気をつけること。文法指導の後で何らかのプロダクション活動を行うような授業構成とする。

説明後、質疑応答の時間を持った。参加者から、具体的な授業方法、シラバスの書き方、評価方法についての質問があり、大学教育開発センター所属英語担当教員が回答した。

平成 25 年度に導入が予定されている Communicative English V / VI の詳細については、平成 23 年度中にその詳細を決定する予定であることを大学教育開発センター所属英語担当教員が説明した。

[参加者アンケート集計]

本研修会を受けて参考になったところ、お感じになったところなどをお書きください。

- ・全体的にいい感じでよく準備されていました。
- ・シラバスの書き方。
- ・新シラバスのことがよく分からなかった。
- ・シラバス作成の基準がいい加減で、こちらに累が及ぶような不安を感じた。
- ・変更点がわかり、出席の意義はあった。説明も分かりやすかった。欲を言えば、手続き上の話だけでなく、全学共通には今何が求められているのかなど（問題点を含む）ビジョンも語られるべきではないか。
- ・わかりやすい説明でした。
- ・全学共通科目での用語「目標」「基準」「スタンダード」などが混在しているが、整理統一してほしい。わかりづらい。
- ・シラバスの記入についての説明が分かりにくかった。

- ・全学共通教育に初参加です。大学の授業で「教える」だけでなく、学生自ら「〇〇」できることが重要視されていることに驚きました。
- ・教授会や学科会議で聞いていた事項とズレがあるように感じた。
- ・全体像がよく分かりました。
- ・シラバス (到達目標) の書き方。
- ・情報リテラシーはリーフレットが準備されないなどがっかりする内容だった。TA の件も予算決定前に授業は動いているので建前にしばられず対応がされるべきと思った。
- ・シラバスの変更点。情報リテラシーと入門ゼミがコミュニケーションである理由。
- ・全学共通科目の仕組みについて理解できた。
- ・カリキュラムの作成について、色々と工夫をいただいていることが分かりました。シラバス等の締切については日程的にかなりタイトにはなっていますが、これは個々の教員側も努力すべきものと思っております。
- ・「全学共通教育のカリキュラム本格実施について」は後々の説明と重複する点が多く不要に感じました。「全学共通教育に関する事務手続きについて」は資料が見づらい。フォントが小さい。文字数が多すぎる (もっと簡潔に)。元々が色つき前提のパワーポイントが白黒印刷だったのでわかりにくい (白黒でもわかるパワーポイントを作っておくべき)。
- ・読んですむことは PDF 等で添付して送っていただければと思います。できるだけ時間を圧縮してほしい。また送付書類にいただいた方が目を通す教員はむしろ増えると思います。
- ・シラバスの書き方の中で到達目標など詳細に理解することができた。
- ・授業の到達目標が参考になりました。
- ・平成 24 年度の新カリ、特に「大学入門ゼミ」の主旨、内容の概要に理解が深められた。有難うございました。

大学教育開発センターでは、日々の教育活動に直接的に役立つような FD スキルアップ講座等も実施しています。以下のうちで参加したいと思う講座がございましたら、その番号に三つまで〇をつけてください。

| | | | |
|----------------------|----|-------------------------|----|
| 学習評価の基本…………… | 2 | ループリックを作ろう…………… | 2 |
| わかりやすいシラバスの書き方…………… | 4 | パワーポイント基本技・便利技…………… | 6 |
| 授業外学習を促すシラバス作成法…………… | 5 | Web カメラで超簡単動画教材作成法…………… | 2 |
| グループ学習のコツ…………… | 8 | 授業双方向性を高めるクリッカー入門編… | 3 |
| 講義のための話し方入門…………… | 10 | 学習動機を高める授業…………… | 14 |
| 大人数講義法の基本…………… | 11 | 心理学から見た教室デザイン…………… | 9 |
| E ラーニング入門…………… | 3 | 研究室運営方法のコツ…………… | 9 |

その他、本研修会や教育FD活動、全学共通教育のあり方、あるいは広く本学の教育に関して望むことなどがございましたら、ご自由にお書きください。

- ・本を学生に多く読ませるために、図書館の資料のそろえ方を検討してほしい。あまりにも本が少ないので。
- ・入門ゼミと情報リテラシーに共通する内容としてMSワードのアウトラインの使用法の教授について検討してもらいたい。
- ・能動的学習に力を入れるというのなら、大教室で講義が多い全学共通の現状は改めるべきではないか。シラバスに自学自習の方法を示すことで、それをやろうと思う人間は少ないように思う。授業の内容の方が大事だろう。
- ・TAが4月から使えないことについて、使えるように理事と交渉すべきだと思います。
- ・工学部として研究費が少なすぎるため、外部資金が取れなかったときはたちまち運営できなくなる。
- ・今年は参加できたが毎年火曜の実施のようで、参加できない年もある。曜日は年によっても違ってもよいのではないか。
- ・全学の方針をもっと早く決めるようにする必要があると思う。
- ・「情報」のとりあつかいについては、変化・技術の進展が非常にはやく、専門外の「教員」も学生と同じくらいのスキルしかなくついていくことが出来ないと思われます。
- ・担当教員全員に連絡がいくように再度お願いします。
- ・学部のみで開かれる全学共通科目については学部での（あるいは学科での）特性があるのでかなりの内容はまかせてほしい。
- ・マイクの雑音がうるさかった。教室の音響システムの改善をお願いします。
- ・日々忙しくしていてこういう場の活用がおろそかになっていけません。もっと利用した方がよいのですが・・・。